



蹄榧

下三四



門イ曾 4
巻 775
巻 232

世めいあらぬ事のかげさなりともあつては

酒を飲めて志けりて酒と具とけり

くめりぬゆゑともいふ飲人の顔は

くまゝ眉をひそめ人めをうりてをん

にげんとすりとらてひきとめあすくは飲

きられいかりき人も忽ち人となりてをこ

がまゝく懸^シ果^キなる人も目のまゝは大事の病

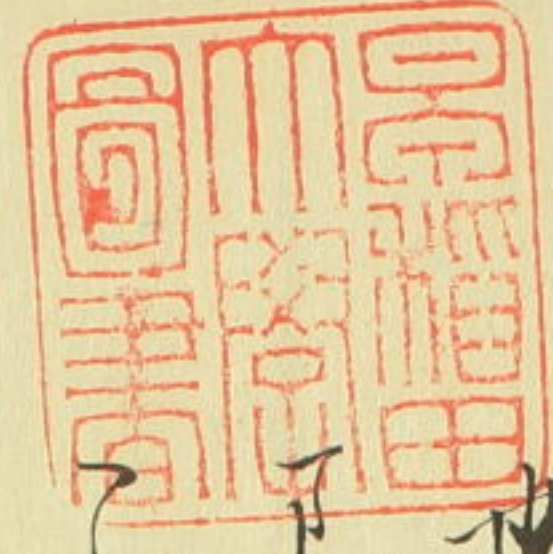
若くありくおなまあはれぬすいふ

ついで日やぶの浅きうらぬぐあはれ目や

張^シいとく物くりぬまひり一生をくそをな

やうして昨日の事さるばるおなまを

くは大事とらてわつてひきぬる人をして



かぶれぬをさるる意也もあへて礼義もあらじせ
こぢくくく絶ちよあひまゝん人福くく口惜や
思ひけくんや人の國にけさるひあつとこれ
うらぬき人半とて傳つらんあやしく不思議
議もたほぬぐ一人の上とてさるるきよも
只ひ入るる海はふらふら一人も共りよあそ
りくひのちり河はほくえちくくゆがひひる
くさくたかくわげてよまゝいさく日暮れ
人にもえくも甘に親接をわくかぶらくやと海
ゆりは教らりゆらまそくらりくひ盛まらる
よらりつよぶらうぬ人のゆらぬて京さあて
やぐくくもくひあるゆらあて 妙は海と出ん

あつてひまゝ一年まゝる法師りかえられと海
くさくたかくわげてよまゝいさく日暮れ
人にもえくも甘に親接をわくかぶらくやと海
ゆりは教らりゆらまそくらりくひ盛まらる
よらりつよぶらうぬ人のゆらぬて京さあて
やぐくくもくひあるゆらあて 妙は海と出ん
わのいふ叙めいさく半もあつとくく云
まゝとあつて酔を記し下りた人の方にあひ
いさくひて浅る友をさるて 恥くくく
アのひありてけといゆらぬ物も
海より海馬車より海へあやまあつと海物
りもあつとぬきく大海とよらあつてはいひ
門乃下りたむきとえくいさぬもあつと
年と繁栄うけらる法師はあつとあつと
さつてあつとあつとあつとあつとあつと

くわゆる一は事なりといはせよなほ世も益を成
わぶる一は事なりといはせよなほ世も益を成
と夫の病とまじく百業のそとに下りて病は
酒よりこそとこれ真なりといふ下りて解する人
そとに下りて病は世も益を成
人の智慧とていふ善根とてやを事とては
下りて一は事なりといはせよなほ世も益を成
おのれ一酒とていふ人飲する人むるは
る心ありては世も益を成
うむる一は事なりといはせよなほ世も益を成
さくもあつて一月乃水雪のありては世も益を成
くも心ありては世も益を成

無欲なりといふは世も益を成
た乃入るていふは世も益を成
るれあつては世も益を成
かきあつては世も益を成
身ありては世も益を成
一は事なりといはせよなほ世も益を成
ゆいといふは世も益を成
何れといふは世も益を成
うむる一は事なりといはせよなほ世も益を成
よき人の心ありては世も益を成
の病をいふは世も益を成
とすめといふは世も益を成

今生存生酒とありめむありきと也
 往生礼讚云恒以願患毒害火焚燒智慧慈善根
 若戒戒と破りて 飲酒戒と破れハ自餘の戒
 と破りあり
 大藏一覽第三云毘婆沙論云有二耶波索迦稟性仁
 賢受持五戒專精不犯後於一時為渴所逼見一突中
 有酒如水遂取飲之爾時便犯飲酒戒時有隣雞來
 入其舍盜殺而啖後犯殺與盜戒隣女身雞來入其
 室強逼交通後犯邪行戒隣家告官評問拒諱後
 犯誑語戒如是五戒皆由酒犯佛告諸比丘汝等若
 稱佛為師者自今已往下至茅端所沾酒滴亦不得
 飲

今生存生酒とありめむありきと也
 往生礼讚云恒以願患毒害火焚燒智慧慈善根
 若戒戒と破りて 飲酒戒と破れハ自餘の戒
 と破りあり
 大藏一覽第三云毘婆沙論云有二耶波索迦稟性仁
 賢受持五戒專精不犯後於一時為渴所逼見一突中
 有酒如水遂取飲之爾時便犯飲酒戒時有隣雞來
 入其舍盜殺而啖後犯殺與盜戒隣女身雞來入其
 室強逼交通後犯邪行戒隣家告官評問拒諱後
 犯誑語戒如是五戒皆由酒犯佛告諸比丘汝等若
 稱佛為師者自今已往下至茅端所沾酒滴亦不得
 飲

目第四云諸經要集云長光莎伽陀能降惡龜偶因施
主持酒與飲醉倒在地無所覺知佛與阿難行到是
處見之知而故問是誰耶阿難答言降龜長光莎伽陀
仙言蝦蟆今尚不能降爭奈龜耶仙歎曰聖人飲酒
尚有此失何況凡夫 又云如未曾有經開飲酒文殊
問經開食肉等計此乃佛初成道時量象生機不可
頓斷頓制所以漸開漸制後知象生根熟使乃永斷
永制纖毫不許

酒有三十九失 般若論云佛告難提洎有多過一費財
二多病三多諍四無耻五惡名六少智七所得不得八
自說隱事九作事不成十怨本十一力少十二色壞十三
不敬父十四不敬母十五不敬沙門十六不敬婆羅門十

七不敬叔伯十八不敬佛十九不敬法二十不敬僧二十一
友惡人二十二遠善人二十三破戒二十四無慙愧二十五不
守六情二十六從色二十七人憎二十八親嫌二十九行不善
三十捨善三十一不任用三十二不涅槃三十三枉因三十四
惡道三十五意不能修惠也

此事大戒一覽才四十七之久久少累也

酒之りて人々飲てり人
梵網經心地法門云是酒起罪因緣而菩薩
應生一切眾生明達之惠而反更生象生類
倒之心是菩薩波羅夷罪又云若佛子故飲酒而生

酒過失無量若自身手過酒與與人飲酒者五百世
無手何況自飲不得教一切人飲及一切象生飲酒况
自飲内着故自飲教人飲者犯輕垢罪
孟子離婁下禹禹省酒而好善言注戰國策曰儀狄
作酒禹飲而耳之曰後世必有以酒亡其國者遂疏儀狄而絕
省酒

かゝらうとありしもの物なれど 是よりよきを
別座くまらふ本ありと合せそ一服くはきより
とまゝ飲酒はあゝさゝと成りいもよりして
飲酒のよき事と云るなり
月乃氷雪は如花の如

陳鴻長恨歌傳驪山雪夜上陽花朝 李白月下独
酌詩花間一壺酒独酌無相親奉盃邀明月對影
成三人

又揚誠齋月下傳孟詩西鶴林玉露一尺くたる
謝惠連雪後梁王遊於兔園乃置省酒命賓友
天寶遺事王元寶每大雪掃雪開徑迎客飲宴謂之
暖寒會

李白宴桃李園亭用瓊筵而坐花飛羽觴而醉月
白樂天詩花下忘飯因美景樽前勸醉是春風

かれくまらぬありの酒の中より唐に
に粟田真人が唐國へ入て則天皇后よりみへて

蘇注^{ソウシヤク}殿^ノ宣^ノ寧^ノ一^ノ々^ノあり又宋史より東坡が
宣^ノ仁^ノ皇^ノ后^ノは^ハ前^ノより^ハ侍^リり^ニ事^ノあり^ト云^フは
事^ノ思^ハひ^ニあ^ハぬ 沖^ノ酒^ノ 汴^ノ河^ノ 祭^ノ時^ノ必^シ書^ク也

大^ノめ^テり^ノの^ノり^ニ 宋壺山夜雪詩一炉^ノ茶^ノ火^ノ三^ノ盃

酒^ノ准^レ記^シ山^ノ陰^ノ有^リ戴^ラ逵^ノ

沙^ノ々^ノれ^ノ何^ノか 催^シ馬^ノ樂^ノは^ハ我^ノ家^ノに^ハ戸^ノを^ノり^テ帳

と^ノも^ノと^ノれ^ノハ^ハ大^ノ夫^ノき^ニま^シせ^シひ^コよ^クせん^トさ^シか

め^ハち^ハあ^ハよ^クせん^トあ^ハり^トひ^ハさ^シら^シり^トせ^シよ^クせん

ち^ノり^ノゆ^リゆ^リさ^シ人^ノの 彦^ノ山^ノ三^ノ咲^ク竹^ノ林^ノ七^ノ賢

飲^ム中^ニハ^ハ仙^ノの^ノ教^ノの^ノ一^ノ一^ノ

罪^ノゆ^リり^リ 張^ノ安^ノ世^ノハ^ハ席^ノ官^ノに^ハ醉^シて^ハ殿^ノよ

ゆ^リり^リと^ノゆ^リり^リ 丙^ノ吉^ノハ^ハ中^ノ吏^ノの^ノ醉^シて

丞^ノ相^ノに^ハ車^ノ上^ニに^ハ吐^クて^ハ醉^シ飽^シの^ノ失^トと^ノ以^テ士^トと^ノ云^フの

つ^ノめ^ノと^ノは^ハま^シて^ハ侍^リを^ノち^ニて^ハ漢^ノ書^ノに^ハあり^ト醉^シ人

と^ハ不^ノ言^ノ討^ト云^フ義^ノあ^ハれ^トも^ハ世^ノ教^ノに^ハあ^ハる^トハ^ハ大^ノ飲

を^ノ戒^ムむ^ノ事^ノ也

あ^ハき^ハあ^ハる^ト あ^ハる^ト酒^ノ一^ノ一^ノ也

ひ^ハま^ハあ^ハる^ト 戸^ノ障^ノ子^ノを^ノと^ノあ^ハけ^テる^ト也

ひ^ハま^ハあ^ハる^ト みる^ノの^ノら^ニも^ハあ^ハる^ト也

ひ^ハま^ハあ^ハる^ト みる^ノの^ノら^ニも^ハあ^ハる^ト也

は^ハ酒^ノと^ノ飲^ムは^ハま^シる^ト何^ノも^ハあ^ハる^ト也

筆^ノに^ハま^シる^トは^ハま^シる^ト 形容^ノを^ノり^ニて^ハ帝^ノの^ノ酒^ノと^ノは

將^ノ來^ノは^ハま^シる^ト 人^ノの^ノ疾^ノ病^ノに^ハ加^シて^ハ常^ノ同^ノあ^ハる^ト也

夏^ノ夜^ノ氏^ノの^ノ酒^ノと^ノに^ハま^シて^ハ儀^ノ状^ノを^ノり^ニて^ハ周

公且酒誥と作りて國民といひてめて品ふる
ア〜の酒とのめく此酒なり夫も厚も沈酒
〜ともしも〜國と作り古今サカ〜す
減〜い酒〜めれを付〜也然〜毎佳樽
杯飲是れは好也いめんぐ玄水とそらんや
〜と量たをれども礼よれ〜ぼ〜す〜あ〜い
魯論〜い〜り克夫仲晦も三盃の微醺
と息とぞ〜もあ〜す酒ハ宿主おら〜い
と交〜隣里の好と修〜り〜の〜る〜れ〜い〜る
〜〜びみ〜ご〜い〜い〜い

大藏一覽第三未曾有經云昔波斯匿王遊獵釀甚初
斬厨官名修迦羅唯此一人称王意者末利夫人聞之即

貝酒饌往至王所共飲相樂王暝乃歇輒安傳命莫
殺厨官王至明日顔色憔悴夫人問何患耶王言昨
日饒火所逼怒殺厨官悔恨愁身夫人笑曰其人猶
在王大歡喜王即白佛末利夫人持佛五戒犯此飲
酒妄語二戒其事云何世尊答曰似此犯戒得大
功德無有罪也
又云祇陀太子曰得酒念戒不行惡也佛言若如汝者
終身飲酒有何惡哉

黒戸の小松沖門位よつとを結て首きく人よれい
〜ま〜時き〜る事〜を勢結〜と志を結

さうしうふらうらうかりさういふさうとひひあり
然のく成敗くあやう乃半也庭儀をな
りある人うらさすあことまうらうらういひあり

總念中書王 孫儀院才一乃皇子宗尊
親王一品中務之征夷大將軍也源朝時
孫念王と將軍に成ゆ中書中務
乃唐名王の親王也
作之本德政入道

東鑑四十建長二年十二月廿九日德政太郎九衛門
入道心願者佐々木德政前司義清嫡男幕府近習
也俄出家遁世記云と若狭前司泰村度々弟座者

上下の事而及喧嘩故今及此云

蘇れらば 晋書陶侃嘗造船其木屑并頭皆
令籍而掌之其後元會大雪始積廳事前猶濕於
是以所掌木屑布地 兼服之題陶侃詩曰致力
中原了無事并頭木屑乞功名

吉田中納言 藤房は万里小路と吉田とも
号ありあり

或は乃さういひ内侍有は沖津東と云て
人さういふとて宝鏡と云人ぞあり給ふ
あざりあやうらうら女房は中と別

傳ツケりてあもるんぞくあよほ見れ江師シヨウシくめ何
りり才サイ覺カクよそウトウんん是來る唐土乃
西明寺シメイジの山ヤマわきり勿モト禱ロウなりりりり

入宋 久シ好ナくわりりり唐のせるれ入唐ニラと云
宋元シヨウゲンの所るれ入宋入元ニシと云也

道眼上人 道元ダウガンくく云人あれが別人なりり

道元ダウゲン越前永平寺エツヘイジの閑山クワンサンめく日本曹洞ニッポンソウドウ

宗シユウ始シ也 釋書シヤクショ云道元建長五年八月

死シ然シカ也ニ弟好テイコウりり前代の人ゼンダイノヒト也ニ愛アイの道眼

兼好ケンコウ同時也ニ此コノ草クサ子コは末マタ急キウ好コウ如ニ宗シユウ淨ジユウ寺ジり

行ユキて道眼ダウガンは談議タンギと云ニりりりあり

一切經 大藏經ダイザウジユウ也ニ五イ十ジユウ餘ヨ卷マクと七十餘卷

こ乃多コノタ少シウあり

首楞嚴經 十卷あり 大仏頂ダイブツテイ如來ニ密因ミツイン修

證シユウ了リョウ義ギ諸菩薩シヨクバツサツ力リキ行ユキ首楞嚴經シユウレイガンキユウと云ニりり

と楞嚴者レイガンノシヤ梵語也ニ涅槃ニハツ云ニ首楞嚴者シユウレイガンノシヤ名ナ一切事イツクシ究

嚴者イツクシ名堅ナカク即一切事イツクシ究キウ竟キョウ堅固也ニ得テ此コノ三昧サンマイ

觀法如幻カンホウニク於法自在ニ唐則テイニ天神テンシ龜元キゲン年

中チュウ天竺テンシク沙門シャモン般刺密帝ハンシツミテイ於廣別コウベツ制止道場シジダウジョウ

譯ヤク正諫テイケン大夫ダイフ房フウ勒レツ筆ヒツ授ジュ烏長國ウチヤククニ沙門シャモン弥伽ミカ

耨迦譯ニウカヤク長水沙門チヤウスイシャモン子濟疏シキスと作シりニ懷ヱ意イをニこ

れと初ハツと又マタ師シ子シ林リン惟別ヱイベツと會エ辭ジと着チヤク也ニ

那蘭陀寺

楞嚴經中印皮那爛陀大道

場徑とも申すなり疏云那爛陀也云施無厭即龍名也西域記云菴沒羅國有池池中有龍名施無厭寺道彼池故以標號

江帥

大江匡房卿也右宰相帥の故よ江帥と云

匡衡

匡衡 成衡 匡房正二位権中納言 儒者

江中江中 江中江中 匡衡匡衡 匡房匡房 成衡成衡 匡房匡房 儒者儒者

ありては口きく有りぬる世々かきそつなり

物と云調も江中江中 字なりと云るはなり

西域傳 玄奘三藏三藏 天竺天竺 一河して其記録

十二卷あり西域記と名づく

法顯傳 法顯法顯 之飛渡之飛渡 之此記録也上巻

あつてなり

西の寺

唐と云法相宗法相宗 沙河門沙河門 圓測圓測 此唐の

寺也圓測圓測 の窺基窺基 乃中子基中子基 の玄奘玄奘 乃才

子也白氏文集白氏文集 にも西明寺西明寺 牡丹牡丹 妙約妙約 云

わがちやうの正月正月 打ちつらぎちやうと真言

院より津泉苑津泉苑 出出 へ橋橋 あらふ也法成法成 就

乃池乃池 へそとともやたの津泉苑津泉苑 乃池乃池 といふ也

わがちやうの 三球三球 打打 三球三球 杖杖 爆竹爆竹

左義長左義長 此書此書 やうあましくあり

頭胎袖頭胎袖 中抄中抄 十云十節録十節録 黃帝黃帝 取取 虫虫 丸丸 頭頭 毬毬 之今

毬杖是也。以被例漢土年始用。件事國中無凶事仍
日本國學其例。年始打毬杖。然則毬杖玉冠春
云也。

事文類聚 爆竹 神異經西方深山中有人長尺餘
犯久則病寒熱名曰山臊人以竹著火中燂燥有電
而山臊驚悼 歲時記爆竹燃草起於庭燎

法書を考ふ爆竹の除邪と元日と云ふ事
事也上元のあはれに上元は漢武帝の古しと
祭るゝ成何より祝のあらはれをたうらふと
事乃始として燃燈の事あり又天竺より

正月十日僧徒あつて灯と云ふ佛舎
利と云ふ事あり爆竹の事あり日中
さざりやうを傍家よりひたりの漢の帝の時
けりめて天竺より佛法よりおきたりと
やあんと訴ふよりてと云ふと云ふんと
仏徒と云ふと云ふ道士は古の古より大に
かゝゆゑ居士は書焼たてられ丸の成長より
と云ふ左義長と云ふ又西域義長や東土
と云ふ西域佛法の義よりありて東土へ流
布すゝと云ふ事也と云ふも漢の書と
けり事なれは紙と云ふと云ふと云ふ
正月十日と云ふ事ありと云ふは神中抄

祝詞同 一は義と一ととてべらなり

真言院 拾芥云在八省北僧綱人侯勤御修法念誦

等

神泉苑

拾芥云天子遊覽所以近衛次將為別當

乾原園謂之正殿在園墨石二條南大宮西八町三條北

壬生東善女龍王常見此所上代御別者有公當長

保年中道細補

物れこいゆさきんあこ松よりの事よ松の
さあひらりいゆるれ松宮のふたまん
粉宮さきとあやまりてらんあまの電

かきやまのさきゆくさふりさあり物あり

りさきありひさりまや鳥松後松れく

松りさきと雪ありさき作れり

瀧波典侍り日記

こゆえ

謝女

雪と塩

香山雪

と玉清

王勉

雪と豆猪

さきあれい米粉よはくさき事さき

さき

うさやまゆき

牆垣

樹木

の故也

瀧波

日記

と雪あり

紀貫之

土佐日記

舟子の

さきと書載

さきさき松ありさきと雪さき

よ。子にほくはんごらあはたやへゆる
りんちうとあやらあらんがつやげん急の
うるももろをいもいれせめこらんちうこ
けしてあさのりりわざとせふのこを
おのれごみさす。凡^{ツカクラ}沐^{ツカクラ}お催^{イサ}馬^{ウマ}樂^{ガク}あがもその
うごふ寝^ネみひ^ヒれて字^ジ着^シつ^ツ符^フを^ヲ終^シ事^ト
お^ホ一^{ヒト}と^トは^ハ童^{ドウ}謡^{ウタ}俗^{ソク}詠^{テイ}い^ハり^クい^ハあ^ヤ
ま^マぐ^グ俗^{ソク}間^{カン}の^ノ符^フの^ノ撰^{セン}倉^{クラ}は^ハ謡^{ウタ}
芥^{カイ}よ^ヨこ^コけ^ケん^ンぢ^チや^ヤ二^ニぎ^ギん^ンぢ^チや^ヤ。こ^コろ^ロん^ンぢ^チや^ヤ。
に^ニあ^アん^ンぢ^チや^ヤ。ち^チこ^コれ^レを^ヲこ^コろ^ロと^トい^ハふ^フ。あ^アも^モこ^コも^モと^ト
り。十^{ジュウ}方^{ハウ}糶^{リョウ}豆^{マメ}の^ノり^リも^モこ^コよ^ヨ。思^シま^マは^ハ深^シお^オふ^フ。あ^アめ
牛^{ウシ}め^メら^ラう^ウぐ。杖^{ツエ}は^ハお^オけ^ケて^テも^モり^リと^トい^ハふ^フ。それ^レい

ろあへけんのみ。見^ミい^イ徳^{トク}念^{ネン}の^ノ町^{チヨウ}より^リの^ノ一^{イチ}間^{カン}
町^{チヨウ}二^ニ間^{カン}町^{チヨウ}や^ヤ。ご^ゴの^ノふ^フあ^アり^リあ^アら^ラは^ハこ^コよ^ヨ。
廁^{カソバ}み^ミぢ^チや^ヤ。ち^チと^トり^リふ^フは^ハ付^{ツキ}商^{ショウ}女^メ房^{ボウ}志^シの^ノ
籠^{カゴ}あ^アら^ラう^ウぢ^チや^ヤ。あ^アも^モい^イも^モと^トい^ハふ^フ。
右^{ミドリ}あ^アへ^ヘと^トあ^アら^ラあ^アの^ノ氣^キの^ノつ^ツて^テち^チ紙^シと^トい^ハふ^フ
向^{ムカ}り^リ十^{ジュウ}方^{ハウ}と^トい^ハふ^フ。こ^コれ^レと^トい^ハふ^フ。豆^{マメ}と^トい^ハふ^フ。
ち^チも^モあ^アら^ラう^ウぢ^チや^ヤ。い^イ餅^{モチ}と^トい^ハふ^フ。あ^アも^モあ^アら^ラう^ウぢ^チや^ヤ。
か^カら^ラす^スぢ^チや^ヤ。あ^アの^ノ事^{コト}也^{ナリ}。深^シを^ヲい^ハふ^フ。と^トい^ハふ^フ。
う^ウや^ヤ。さ^サら^ラう^ウぢ^チや^ヤ。あ^アも^モあ^アら^ラう^ウぢ^チや^ヤ。目^メく
ら^{クラ}い^イも^モし^シ七^{シチ}時^ジの^ノ威^イ勢^{セイ}あ^アら^ラう^ウぢ^チや^ヤ。の^ノ育^{イク}目^メさ^サり^リ
その^{ソノ}あ^アり^リと^トい^ハふ^フ。あ^アも^モあ^アら^ラう^ウぢ^チや^ヤ。と^トい^ハふ^フ。
り^リあ^アも^モあ^アら^ラう^ウぢ^チや^ヤ。の^ノ俗^{ソク}詠^{テイ}は^ハ柶^シの^ノ下^カら^ラ高^{タカ}直^{チキ}の^ノ

折どもおしきほりれどもかきまほ伊東政土
 肥殿お肥がむらめ振系保八女殿のむら
 及見ハ蒲御曹子ゆ沖連枝るれどもよき
 もつよまわも何れ申よならぬりぬ成當
 蒲のおれどもねくまほりふ也と介伊東
 殿より下ハ時法大衆控柄の人みてもその
 のありたりといふなり又一説よ上は方最明
 寺法時の事也あめ牛ハ最的ちとり也とも
 云傳より又高雄の法華會ハ傳教大師
 よりともまり毎年一月十日に於こおれ
 案定して人多くあつまり高雄を法記
 舎やまうにいとよと云づるといあやま
 してやまういふおよとやすありは事ほ山
 の縁起よんころり

曰條大納言隆親ノボリころりけと云ののと依ヨ
 下ノころりれふりけるをかくめやき物モノは
 やうめころり人のゆきるをかく大納言ノボリ
 リよ魚まのり思事とてあらんよそあも能
 のろりや何れ事うあそあめれあ
 ばい下ノのろりぬるころり

隆親 四条隆季 隆房 隆衡 隆親権大納言正二位 檢別當

切ツケ 干カン鮭サケと書 和名云雀ササガ島錫食シヤク注云鮭サケ折サ
又和名佐介サケノサケ今案俗用鮭字サケ其子似苺イチゴ音茂モウ今按苺子即イチゴ
非也鮭音圭ケイ鮭鮭魚一名也サケノサケ覆盆也イチゴ見唐韻サケ
赤光一名年魚春生年中死故名之サケ

凡魚之生於海者皆曰魚サケ漢魚サケ也
鮭魚サケも云串サケつらねたりサケ鮑魚サケも鮭魚サケ
も法魚サケも云塩サケは法サケなりと醃魚サケ鹹魚サケ
魚鮭魚サケも云本系綱目ありサケ
鮭魚サケありサケ

東鑑第十建久九年十月十日賴朝於遠江國菊河
佐々木三郎盛綱相副サケ小方於鮭楚割サケ敷サケ以子息小童
送進御宿申云只冷削之令食之處氣味頗懇切

早可開食歌サケ殊御自愛彼折敷被深御自筆
曰すち得る人乃子さけとすまやと乃と
りをくはるのありサケ

鮎アユ乃ありアユ 和名云鮎魚一名鮎魚アユ 和名安由揚アユ
銀口魚入アユ 春生冬死故名年魚アユ 武漢語抄云アユ

宗廟アユと云乃アユ 稟魚曰高祭鮮魚曰稟祭アユ
曲礼アユと云乃アユ 鱒魚アユ散隨以為夏槁助生草也アユ

鮭サケも鮎アユもひサケあり魚ありサケ 傳傳サケ
鮎アユもさけりアユ 鮎魚アユありアユ 和名集アユ
り云乃乃鮎アユ鮎アユ世久アユ書傳アユ

州女房松下禪尼相州等群集安東九衛門光成
奉行有祿物等銀劍丸衣馬置鞍等
ちをのれゆり
禪尼にお換ると法約

せうの城分義景 せうの兄中も禪尼
と義景の兄弟也祐田城分義景が事也

東鑑の祥也
けいめい 北伝書もの禁煙し書りて愛
まてい 経営とまてい 夕親巻よけいめい
あり瓜原沼類聚の敬余とまていやま
ちとまてい也
ゆい破れりる和 貞永式目よ小破之時且

加修理あり泰阿が法政也彼禪尼もやう
ゆいめいとまていゆいめい先祖の
風と時頼の教もあまなり

俟約とりす 論語子曰以約失之者鮮矣
又曰奢則不孫俟則固与其不孫也寧固
何晏集解云去奢從約謂之俟

此後俟約と人たると人よあめさんとせられ
兼公り寝不し喜悼二十餘年時より破壊
益命神算にあり其三公は位よのりて
橋直とまていゆいめいあれあり
ゆいめいあれゆいめい劉宋の君の葛灯籠
麻繩拂とまてい田舎翁の具也と云つり子孫

あつふあつふ

城陰奥守泰盛ヤスモリはしうなまき馬のり也なり
馬とひさしあきせけりよ是をうけりてきまを
ゆりつこころはけりていしひさあはる也
そて鞆と置りきとたり又是をのびてあき
らよ蹴あてぬれい是いよがくしてあやまち
ありてとて乃くさわりたりとあつふ
人うそりたりとるれせんや

あきま 國ともあつ

道と知まり人いおそれたりふ事御と執り

かきうす事事よわりて
存ありも入然り入チモ虚如入キニシ執虚如トシモ執盈
とていはいまよ玉夫りあつふ敬
しそ事とをとなりてあやゆりまくれる
て故よ先儒敬の字と執まりよ異の
字と用る事は義るなり

昔田中馬ウマ棄のり約一はるころにころ
りのも人の力あつふびと知てての
つらるといふづよくして強さい弱さい
て次よ懐鞆がよあやまちあり

下されぬまいと有りてありては若くは限ある
りぞて衆をり醫者たる時めこそ有りて救世の
醫師法をせんごうごう人よ進んで醫學
と疾治あり時をわくは年もわくは智
つもの切もありて應じらんごたのき家傳は
宿習のありて云われはた快もあるべし
又一歳の猫児の十歳は罷ととりもあれ
只主人よよりてやゆんご茶のりける
戒人のよりき醫術より成る藝のよ
ありては學問のたも又あり
おありありと 聖門として曾子曾子
して篤實たるまいつのよ一貫の傳とほる

ありれども真のト思ハ忍ム入て善に入
事れ 樂討る忍も畢竟ハト思ハ至極也
たんと有りて 蘇秦張儀の揚聲の法たみ
ありざりよありて然もた有りつ有り
ありひこなりぬは果して災難よあり

戒者ふと法師よありて學問して因果の理を
もあり況んやありてせよとありてありて
りひんれハ教のまふ況んやありてあり
先馬よ乘りひんり興東もたぬありて
は續きつれん時るわんびくよおをん

もどかりめて落おん心うりりづ〜にあらり次
一仏事のつち酒をどすむる事あ〜んは法師
は下下に結るよの檀那だんなはさき〜くあか〜
そそ早歌はやうたとさ〜は習ひたり二つわびやうや
うけりひよ入られ〜いり〜よ〜むさ〜く覚え
稽たしなけりやど〜洗せん浄じやう智ちあ〜る陳ちんあ〜て年ねんよりよ
字じりは法師の〜もあ〜は世よる人ひとなりて
以事ありあ〜る法事ありつけても念ねんを
大なる道みちとも成な〜法ほふともつさ〜学がく字じともん
とけ未久〜〜あ〜まは事〜もんみたりを
るが〜をとの〜あ〜りて打うお〜りつ〜まだ
〜あ〜り〜は目めはあ〜る事〜の〜ま〜は月

日を送ま〜〜り〜る事あり〜てあ〜と〜
〜と悔くれもな〜り〜り〜ヨハレ〜孫まごの〜て
坂さかを〜る輪りんの〜〜に喜よろこ〜ゆ〜たれ〜一生
れうらむ〜あ〜ま〜か〜ん事の中〜よ
いづれ〜すれ〜す〜おのひ〜〜てす〜つ
事と案〜一定して〜あ〜ひ〜す〜一〜事と
りげ〜〜一日の中〜一〜時の中〜あ〜〜
〜の〜〜〜あ〜〜あ〜〜は
〜あ〜めて〜あ〜〜ら〜す〜大〜事〜をい〜さ〜
〜も何なに方かたも〜も〜さ〜〜〜り〜あ〜て〜
一〜事〜も〜な〜り〜〜〜〜〜が基もとと〜う〜つ〜人〜一〜事〜
〜ら〜〜〜よ〜ま〜び〜人〜〜あ〜〜ら〜て〜小〜と〜あ〜ん

人の命は雨のまねまきともまきつ物をも致もあま
ひのこもようともあまをわらうはらんやとてをり
あてあつてあひひゆりふりりく戸侍らるるを
ゆりくあまごころえんゆき敷さくハ則功あ
るごとく福流く云文もゆりあふは為を
りりりくあまをりやうよハ大車は因縁を
ぞあまごころあまらる

世海りたつと 大はきいさより也
お款 今あふあのかうりへ 津楽権馬
楽の中にもお款あり
坂とくごる輪 後漢皇甫嵩傳簡忠曰逆坂

走丸迎風縦棹豈云易哉

其念とらの人 其經を細柯徑と号はま中
は捨小而取大と云事あり
ますかめすさき 長明寺名抄云雨は海を
る日或人のりよあまらりあはまらり
てあまごころあまごころあまごころあまごころ
肉そくは落くまいつりなる落ぞれどりひ
ありふ物にあるを人のりよあまらりあはまらり
しそけ事知るる習いありとすゆりくぞれ
やはりひあまらりり 登蓮法師ま中あり
ては事とすて洞くあま成て又らあまも
なくあまらりり 叢雲あまらりあまらり

れども和おけるひひあうのたこととらる
ゆりも又よの法縁のこも也人あゆみ
らずるふりよりさうさす越前名色濱
あかのみまふゆえお小貝ひうふええ
濱とふあやありん 西行

登蓮法師 世の中お人の心のを記書に

空がくれちりあり河津の月 詞花集

敬則有功 論語陽貨篇

一大事因縁 法華經云世尊唯以一大事因

縁放出親於世

以彼無益の所作となりふゆへ年若て死

道一品一大事と序時も早く学びて録事

とゆへたがゆへに也富もそぞおぼゆるさ

まごも又嶮岨艱難はぶさふあがれたる

知ごさき事もあり宋は張横渠のひ

てよりひらくもの学て年十八よりそ

法と法を功名と云ん事見也と自負を

海と荒文正公儒者の何ぞ共と事とせん

てさめそ中庸とゆへにみそみそ心得

ぬ事ありとて秋氏の法莊亮の書と学ぶ

や教年いふらんゆりもあつて六經

まうりて工夫あり洛陽に到て二程のま

道学のりのこりして大よゆりて吾道ハ

うにあり他よ求べうとて云て別異学と

易は後ありて其名を坊より見しごとく
理よあつたや水火山澤乃互ふ氣を
寒暑を秋のつらりくある誰う不定とん

妻のふものこそをのこおまごさめあれ
つも独ヒトずこそおどおど心くられ誰じ
うむよ成ゆも又おのなるゆ成れすて相
おどおのれに下よんをとりきうゆわど
るりこらゆの事あさ女とよこ思ひさめ
らそりひ升こめど職もをいつくも結
かなるはは男をぞ雇うをくしてあが伝よ

のわさめたさいさうりよこ思ひさめ
して家ろらちをたさひおさめさ女
はかふおどおどさうりつと責さめ
男あく成てほらるりて年よりあはれ
あさゆきで浅きつるなる女りとも
そひんんあいのつきたくめくうりさ
ふもおさるこらるこめさぬがう時
ひさまんこそ年月してもをぬあひ
ちらんあつたゆさそとまりわをどん
り

妻のふものこは 南史齊何點隱居不仕絶
何尚之強為娶仕氏礼畢將親迎點涕泣求執本心遂罷

めらうは年久あうてはふ婿とちたをりた
別室^{ベツシツ}にたいて相見^{アイミ}た人その心とちたこれ
あふりり兼好^{ケンコウ}が人も何^{ナニ}とらんあうりりや
うれ男女^{オノメカ}の人偏^{ヒヤン}のあも男子^{コノコ}に家室^{カシツ}あも
ら孫^{ミコ}がひ女^{メカ}あにたひことりりあうりり
父母^{フボウ}のあも男^{オトコ}の外^{ソト}とちたあ女^{メカ}の内^{ウチ}とちた家
法^{ホウ}のあもすや妻子^シ相^{アイ}つて父母^{フボウ}に鳴^{ナゲ}ふ家
業^{ケギ}のあもすやいめん^{イメン}が五倫^{ゴリン}とちりて道^{ミチ}と米
めん兼好^{ケンコウ}の佛^{ブツ}老^{ラウ}跡^{セキ}とちたけりて家^カ帯^{タイ}乃
累^{ツラ}ひあも事^{コト}とちたふも又^{マタ}女^{メカ}よあも
とゆ^トしり魚^{イサ}ひとちたがもいりり何^{ナニ}と
妻^{メカ}とちたはせぬ道^{ミチ}とちた常^{ジョウ}の人^{ヒト}にたまれ
ともとちた女^{メカ}とあもいりり張^{チヤウ}駢^{ヘン}はわつりりか
ご^ゴとちた彼^カとちた人^{ヒト}高^{カウ}師^シとちたの^ノとちた艶^{エン}とちた
知^チりりれりきとちた師^シ真^{マコト}が人もちたぐひん謙
に下^カにたひゆり

夜^ヨに入^イて抱^エひてくちりり人^{ヒト}いりりはわつりり前^{マエ}の
の^ノとちたうりり色^{イロ}あもちたの^ノみもあもめを
礼^{レイ}書^{ショ}いりりもあもいりり姿^{サマ}とちたあもあも
あもいりりかもあもいりりさうさうさうさう
人の^{ヒト}とちたもあも初^{ハツメ}の^ノかちりりげとちたはちちちち
とちた知^チりりもあもいりり周^{シュウ}意^イあもいりり心^{シン}とちた

ふむいし地りももさむ敷ぞひいさむいさむい
しーてこもるの事りた敷うらまえて戸の合
さしげらるる備るこりいさむいしーりさむい
心とあてるる人の時とまけぬものたれいし
みうららるるぬきお節ぞむりねるくひさし
くありまけりこよさむ胃好日言とゆさむい
如も秋あたる福よすづりつて鏡とりて新あぢ
はくありひてありこもけりし一守禮

く人 映 花乃夕葉おとも書あり
まよさけしる 桐壺おとも書あり
深波部露よ日本紙と引て物なるあり
次りかろま 大しげ也

けもれ 藝晴 字ありれる義也えんを
法礼の義也又私公ともあへ一帝は海地と
字じあもこいし朝服礼服をえれぬとふ
ゆする 糸巻巻よゆさるけさづりよや
河海よ沫の字とあり 沐浴と云
すづりけ 奥に入事也今も奥あうら女高
けりすとさづりよ也
はけさむい男もよさむい初の字一ま
まよさむい也今も初年の風名あがりお鏡
ねる人の目さるもの也

坐禪工夫と専らしく教相よくしむる也

儒者にも神文暗澄あり漢唐訓詁乃儒ハ神文也江西乃學者ハ暗也訓詁ハカサるものハ支離影御者ハ弊あり頓悟ハ走りの虚遠故漢ハ病あり故ハ多シ杜牧道同字ハ二ハりのかりしきも也學て思ひねりひて學ふ時ハ必周殆乃病也

達人乃人成るる眼ハ好しとあやまるはあは
覺ししはをしくハ或人の世ハ虚言とくま
出しと人とりり事ありんよすなむはゆこ

しとあやそりよまふりりり人ありあま
りあや信とたうそな成わづりり虚言
と心成りあり人あり又何しと思りそんを
けをぬ人あり又いりり思成りあはを
をり成りありすまのまふありと弊ハ并
しり人あり又まきしりり思ハゆも人の
事ハれいさありんをわぬ人あり又さ
ゆくハ推しつねりりりりりりりり
りりあつよありえみそわんはゆりり知
らぬ人あり又きりりりりりりりりり
とひりりりりりりりりりりりりりり
ひ人あり又いりりりりりりりりりりり

のぐれわらわくふき

たれやふまきしき思ひて

校人魚を煮喰ていけりて池も故河と

ソの子産由しき思ふ勢也乞ハ道理ある

知るれば智者もあざむりて事あるべし

愚なるも及理ありしき思ふて

伝ぢりものなり

あまうりけりて信とありて 一犬吠形

百犬吠也一人傳震百人傳實おりのり

りの佛神は齊端とソバいりてり

そして雪上加霜なり

又何しき思ひて 馬身は東風なり

又いれりて思ふをく 狐の氷とてくふ 鞍面

味決之人也

又由しき思ふをく 以誤龍衣誤

唐風未だ行ぬとまんのはの角めと知て

又いれりて思ふをく 不知之為知之あれ病爲

而色莊者よりり

又いれりて思ふをく 狗のさねらゆをて又

くちりり人ふとてふを於縁とて其心

定むりて思ふをく

又いれりて思ふをく 以鉄作門

限鬼拍手而笑

又心得しれぬ

不逆詐而先覺者乎

又は虚言の事言と 張儀の楚ありて鄭

袖と謀と通じりく

九人の言真偽あり物と由とくありの愚

外もいも智をいも由をいもれいまくいあふ

さきうういゆも也明君は誤潤層受の行也

ぬやうにたかとおとす兼好の佛法まを

ぢぢくくまづうはるいも我々よりい

彼元来虚妄也在光の群愚を籠りせり

台家に移く抗法よりい二十公品を各方

候といひ禪家ぬい小むと呼の手段あり

と云いあんが自らうらりて人と真實

道よひいよいもんや

掌の上の物 天眼すへた何那律二千世を

名何事掌上の菴摩菓と名分がごとくと

淨名徒よりあり

中庸曰治國其如示諸掌乎 論終るもあり

野槌下卷三者 文政十一年戌子秋九月十八日字之

中村直道

あゆ人久我縄子を通りけりし、少神より大日
きつ人本造地蔵と四乃申す水よと
ひしと念はよあひたり心はささるる
やどよ将衣の男二人出よとあつたけりし
あやうととてい人を具しとのより久我内
大匠殿とぞうけりし者帯ありし
ける所の津所よあんといふ人ありたり
木造の地蔵 ありしはわりの地蔵なり
久我内大匠殿 通基心也
は殿常の津所よありし
と氣ちがひしとけりし

とれたとねいさくゆ也

小山抄 キニタウ 公任の所作也一本よ小野抄あり

小治文の抄也

西宮抄 西ノミヤ 西宮元西宮大后高明の所作也

河海云昔に内々ありきはもされたるものなり

つとくきく用心乃るも也変化の物もはる色

にねりゆくともあり西宮大后神泉苑乃

民角とて変化の物ありりるももさる声

より時いりさ入けるもあり

法寺の簿のみもあはれ定額乃女孺也ニヨシユ

事定成りてるもあはれすべし教さるゆりる
公人の通号なり

定額 續日本紀文武天皇太宝元年八月皇親

年満者不論官不皆入賜祿之額

弘仁文曰大政官府禁漸京職畿内諸國私作御藍事

右奉勅定額諸寺其教有限私宮作先既立割比来

所司寛縱曾不乳察如經年代無地不寺

十八史畧第七元以耶律楚材言始定天下賦稅

上田每畝稅三升中田二升半下田一升水田一畝五升

商稅三十分之一五戸出絲一斤以給諸王功臣湯

沐之賜楨每銀一兩四十介永為定額之教乃

定たりて定額と云や唐志より出たり

吳竹と葉をくく河竹の葉はいつくも海
ありありと河竹に壽殿のくくありと
くくありとくくありとくくありと

晋戴凱之竹譜植物之中有名曰竹不剛不柔非
草非木小異空實大同節目或茂沙水或挺岩
陸條暢紛敷青翠森肅質雖冬蓄性忌殊寒
厥族之中蘊麻特奇脩幹平節大葉繁枝凌群
独秀翦茸紛披管管射筒絲葉桃枝長莢纖葉
清札薄皮千百相軋洪纖有差

河竹 六百考定家佛名あり 河竹はあびく
葉風よくよくあり 雲の佛の少名とすれ
河津 禁庭の海也 唐于祐河御溝紅

葉題詩

仁壽殿 拾芥云南殿小九間四面

禁秘抄に仁壽殿の東小南門に延喜の曆
の時より梅とくくありとくくあり

退下乘乃平都漢外外外下乘内外外
退凡外外

西域記九云如来御世垂五十年多居靈鷲山廣説
妙法摩訶陀國頻婆沙羅王為聞法故與殺人徒
自山麓至峯谷凌岩編石為階廣十餘步
長五六里中路有二窠都漢一謂下乘即王至

此徒行以進一謂退凡即簡凡人不容同往其山
頂

下乘ハ五所車馬下ありたり〜兼也〜
卒却海と云退凡ハ人となりたり〜
そとにあり卒却海と云下乗ハ山下あり
ゆ〜外也退凡ハ山中ありあり

十月と津と月と云て津事より〜
いあり〜
月法社のまつりなら〜
津道を津宮あり〜

まを説き〜
月〜
津と月〜
例也

津と月 貞治の法教沃山薬門由河が万葉
集の注〜
月〜
也其津左の浦〜
い彼浦は津左の社〜
終るは津左の社〜

勅勅乃而の勅くる作法今いふてあはる人
のし主とほは樹大方世中あはるき時
五條乃と津の勅とくまの勅馬くゆき
法的津くしあも勅くけくれりる津也看
猪土の有る勅とま家よりせらまぬ人
あつたけ事絶てはと乃せみ封とたる
こゝらるるらり

勅勅 王子乃内勅也
敵策嘗一歩又山谷倒敵収連的と云
連實乃ぬむのり完か夫と入らるは
似り日本紀津代と天照大神皆負
箭之敵五百對之敵ハ矢鼈也今
平胡録の類あり

世の中さいぐき時 時氣疫病の時也
み糸の天祥 少考名津也高望産靈
尊子也大しきと下と経管して疫病
と治り事めんごあはる事日お記す
乃そをりしと刻もえ 筑にみ糸の糸
よ人こまへ本餅などうけてあやと
乃ぞこあはれ首途とらひりてあり
遺法なり
勅らゆらゆの津
看猪長 職原云檢非違使 此云使廳本所 當
使補看督長六十六人 此為遣諸國也

文よつきてをこたひりて 政をねえぬ迄付年
流布あり也又法念も水火に穢とてと
入物よけられあり

大師勸法起請

元亨叔書釋良源姓木津氏近別淡井郡人也
延喜十二年九月三日生焉十二上歳山師事理山
延長六年禮尊意登壇受戒云康保三年
八月補天台座主領山務者二十年夫元四年
為大僧正兼法務聽聲車永觀三年正月三日
唱弥陀而滅年七十四賜諡慈惠

然延よりハ慈惠と云りり 謚號をねも 山

みわたりて慈惠大師と云也 傳教弘法慈惠
智證の卯あり大師あり

起請文 本物久辨十二年前中出王
山亭起請とて文一篇あり 松潤あり
乞ハ兼明親王龜山よりとりて山莊
於約舎とて懐とせり

又東鑑第六安樂寺別當安徳僧都未閑東而進
永久起請安樂寺別當濫望人義絶状 為安樂
寺別當濫望并氏奉依起大衆義絶事

右肯又余者非子道肯氏奉者非氏人然者在殿
在良 不可為也 嚴實 是綱 不可為氏人 天神御起請
有限任氏奉次第所補任也 今并氏奉起大衆之

革公家可禁制氏人可義絶之狀如件永久六年

正月十二日氏長者式部大輔菅原在良右辨官

下太宰府院年号

法曹ホウサウめ法家といふ法曹とも法家とも

也律令とよくあつひありてゆはしり

家なり法曹要抄といふ書もあり

職原云明法博士二人唐名律明法道之極官也

中右以来坂上中原兩流為法家久儒門以當職

為前途昔允亮道成等以明法道任廷尉佐勘

解由次官等坂中兩家立家已來以廷尉法儒

大判事為先途

起請文と云事のありし盟約言と云

牛馬乃血とすりて血を死と出さるるのみ

約より血若くしりばは牛馬とくまりて

あつて罪ありあつて法非ありあつ

周礼春秋傳等々書くあるをり日わく

天照大神素盞鳥とありひまをい非代

もあつたり也初盟約といひと人の代乃

あつて白川鳥羽乃山村も起請文と云事

あつて自取式目起請乃うらむきあり

或因宿禰が甘美内之探湯一允恭帝は

河氏族乃と云と定めんそ湯と云と

茶と云とにさるるこれとほせり大

起請湯起請乃作ありし茶好が古乃盟代

法大寺の宮大后殿 公孝公也

使廳 換非遠使乃廳也

官人 章勳

大理 換非遠使別當乃唐名也

けまゆり

草即牛食而後出者俗曰回噍 本草綱目駘草一名牛轉

和名曰雨雅集注云歎吞葡萄啞及出而嚼牛曰

齧 音台唐韻有答詩二音字

詩小雅無羊曰雨牛未思其耳湿々 注詞而動其耳湿々

然々

郊牛 郊牛は口やふれらるるとトひ又其角と鬣鼠

性理字義云大抵妖由人與凡諸般鬼神

之狂皆由人心與之人以為靈則靈不以為

為靈則不靈人以為怪則怪不以為怪則

不怪伊川尊人官解多妖或報曰鬼擊鼓

其母曰把槌与之或報曰鬼打扇其母曰他熱

故身後遂無妖只是主者不為之動使自

足あられはくくうらりうらり

又乃相國 公孝は又太政大臣實其基也

又乃相國 公孝は又太政大臣實其基也

又乃相國 公孝は又太政大臣實其基也

又乃相國 公孝は又太政大臣實其基也

無了細觀左氏所謂妖由人興一語說得極
出明道石佛放光之事亦然

任弱の官人 章兼をさる

韻會冠鳥光切跋曲腔也或作冠亦作冠
荀子賤之如冠注廢疾之人

ありん任弱の官人 義也

ありん任弱の官人 義也

千金方黃帝雜忌元曰見冠不冠其冠自壞

泰山殿をさるまんと地をひらねるはたなる
くらがたりほもあつどありあつまりる塚あり
たりはは乃神なりといひてよのうとやれ
といふありとと勅問ありたりあるくより
け地とあめより物をいひはるるくありすをれ
がさしと治人かされたりよはあつ一人まよ
をらんあまを居と建られはは何れをよりと
なりはは鬼邪いようあつ一とびびるは
をさみかあり捨べとととされたりはは塚
とくばして地と大井はあつととたりは
りよありたりありりり

泰山殿

わくより 舊の字也久き義也
はたき お辰の實基心也

王のわくしん虫 ありもあも我大夫の國
をれいぞくろ鬼乃宿しきしめん
鬼神ハよこしぬれ 俗ハ鬼神ハ横

道をししつふがこし
左傳莊三十二年云神聰明正直而壹者也

蛇乃をりしとをそもありを北とをめさあり
鄭門内外に蛇ハ所公子儀り戦と素一深王
殿上乃蛇玉世充屋邊の蛇ハ皆不祥也
沛澤の地ハ漢祖よきしは桓壁乃地ハ唐

太宗よ歎のきししん事とをめすも似り
廣東の佛像の巨地ハ胡打鬼がしあふしをれ
てをりしとをめ永別野廟の大蟒を果應
祥うためふやぶし柳宗元ハ屋宅とば
しんそ蛇と野外よ放棄く宥蝮地文
とばしり

孤樹哀談第二曰南京國學之址舊為積屍
之所謂之萬人坑每遇天張雨濕行人多為鬼
眩有至死者因建雞鳴寺設醮以度而鬼又夜
飛磚擊瓦僧人怖恐馬太后聞而告于太祖曰
世奈孔子大聖人以鎮之是日迁大成木至于此
鬼遂不復為祟因建國子監焉

偷本非禮所以不拜 異本云孔文舉有子大者六歲少者九歲晝日父眠小者床頭盜酒飲之太見謂曰何以不拜 荅曰偷那得行禮 莊子曰田成子一旦殺齊君而盜其國所盜者宣獨其國耶并與其聖知之法而盜之 左傳宣公十一年申叔時曰牽牛以蹊人之田而奪之牛牽牛以蹊者信有罪矣而奪之牛罰已重矣

鐘氏が兎の酒をぬすみて拜するの盗の中礼なき也 田垣の耕とてうらふは國はなほあはれ礼樂刑政とも治ぬむ也 牛をひきて人の田

み入るゝいさむ事也うれせいせめんを牛を杉とくはいりて罪なり 王考ふあはれ禘は祭とせむ魯侯乃禘とて灌を付不敬なり非礼の中乃非礼也又唐は天子の怒り行跡あるは史官おそれてあるさるると記し既におとそひりしるれ悔やもこりうかぐさ 唯まありのさふるをともはしあうりれく忠とすゆえうれとてび変とて善いさむいさむりん
日本紀日神尊以天垣田為御田時素盞鳴為春則填渠毀畔又秋穀已成則直以結繩

そは形をうすそむよるゝ為るあり人志志を
もよあひむらゝむ必多む約も形をうすは
信あり事はそれゝ力も人も多む乃まされ
先なる時よりよるひ形なる時よりみぞた衣
ひあられはさるゝは形なることされは密なるはせ
らるゝ時を司ふまらゝるゝと用は事ありきま
しそまらびひき時を物よりありひありきひてやあ
ゆりくしてやうらるゝ時の一毛も損ぢた人の地
の雲也て地よりさるゝあり一人の性ありがごと
くはらん寛大ありてまらゝるゝは形なるは喜怒
をいさるゝはまらゝるゝありわづらひあり
よるゝの事は形をうすは

いさむひありて 三界柔者徳也剛者賊也
又曰威多則自蹶諱義云威多則又陷其身此驛
信黥布之不克終者皆威多也
項羽乃力山と抜暗意此嗟千人皆廢をりわを
りれども終寛仁大度の人よほりわをいひゆ
へよ吉柔ゝして長存ゝ歯堅ゝて先わを
事ハ帝縦が戒ゝして老耨よくけんと得るり
財わをゝして
鉅橋鹿臺ハ何乃益をく紂宝玉を衣て焚死ぬ
阿房は昇鎔玉石金塊珠璣も子羽一炬火驪山
三月は紅也董卓が鄙鳩終身は備とをたてく
ども白又俄生村英金謾似丘石季倫が富も

孫秀がくめふふふれぬ瓊林大盈の庫をみ
りくして陸宗出て走れ

才ありて 莊子曰孔子再逐於魯窮於齊伐
樹於宋困於陳蔡不容身於天下

史記儒林傳孔子于七十餘君無所遇 法後之記者
失辭也按家語等說則孔子歷聘諸國莫能用謂
周鄭齊宋曹衛陳楚杞莒邾等亦縱歷小國亦無
七十餘君也

注ありて

論語顔回不幸短命而死

孔彰乃ん瓜あつらんハ孔顔の樂と云ふ時
あつた不幸短命なりと云はば此れ常此

人と書つて終つて是のありされど莊子

よひ休めりて弟好が例の筆法なりや

賈生ウ仲丘墨翟之賢と云退之が孔墨は

用やつては是れ異論なりと云

君乃寵也

史記韓非傳ハ衛孫子瑕が君の車一のり桃

は餘と云ふはす寵愛兼くは二事大なる

罪なりと云ふは誅をうけぬ人揚貴死國忠

類も果して馬鬼は鬼と云ふなり

奴も果して

後漢彭寵ハ先帝よりあつたがとて漁陽にあ

つてけりて奴もあつたがとて

キヨマウ

孫壽の其奴よ通して其も終る奴よこゝろせん
しり柳公権が奴と杯盃とぬき張之定り奴ハ
銀器とぬきめり
日なりとも播別大寺の昔蘇我入鹿が臣り
杖夫と云ふありと妻奴と云ふけり杖夫と
あざしと山中より入狩とせんともと射殺さ
しと杖夫二犬あり一犬死ん奴の弓弦とらひ
きると一犬死なりあざと奴の喉とらひ杖夫
おのこゝろと立つと杖夫大寺也元亨歌書あり
人の志とも
凡士率心と愛とく歌ありけりとも其事を
甚ましく朋友なるも又細り

約ともねづら
張牙練餘劍頭の文とむとびとも思敵と
て張牙練信と同く陳餘と殺そ又朋友の如
く張牙練と事まねたり故に朱穆絶交論と作
劉孝標廣絶交論と作
是をり時とありと非をり時とありとみぞ
は二句連續ありとありと非也是をり時とありと
を非をり時とありとみぞあり
山谷作東坡贊曰其愛之也引之上西掖臺坡是亦
一東坡非亦一東坡其惡之也授之於鯢鯨之波是
亦一東坡非亦一東坡也
左也ひのけきいゆのす前は遠るればあさ

がらす け二句わーひりていも 太字 梁 矩
の乃孟子左右達其源云々 孟子 梁 矩
七二二二二 莊子 天道篇 輪扁曰 徐則甘而不固
疾則苦而不入 不徐不疾得之乎 而應於心

一毛も損ぢら 孟子曰 楊子取為我 拔一毛而利天下
下不為也 列子曰 楊朱曰 古之人損一毫利天下不
與也 人々不損一毫 天下治矣

人々天地乃雪也 周書 泰誓 惟天地万物父母 惟人
万物之靈 蔡氏傳云 天地者万物之父母也 万物之
生 惟人得其秀 而雪具四端 備万善 知覺 獨異於

物而聖人又得其最秀而最雪者
孝經曰 天地之性 人為貴 孔安國傳云 凡生天地之
間 含氣之類 人最其貴者也

天地ハウギホカ
宋陸子靜曰 宇宙吾分
内事又曰 天地何所窮 又曰 東西海 聖人曰 此心同
此理 南北海 聖人亦曰 人在無窮之中

キド 怒はしりて
洵浩曰 顔回不迁怒 程子
曰 顔子怒在物 不在己 故不迁 又曰 喜怒在事 則理
之當 喜怒者 也不在血氣 則不迁 若柔之誅 四凶
也可怒在彼 已何与焉 如鑑之照物 妍媸在彼 隨

神前乃大炉又火とてを付と大なり
じ事好くありきよりきざりて
るればありびおらぬやうに
あり幅の事奉に供なれ人
まそ炭とゆきまればあふ有
みきいふ日を火とてをり
と中内もさなり

火が 和名江多岐とあれともうそ火の
こどもいづれ源氏とさよふ糸の
みき少くす火のそくまきせ

想夫恋カウフレンのふガク女男とてふ板の
むすハ相府蓮レン又字のくもる也晋王侯大
くそ家よちりまはるへて素と河の樂あり
是より大匠と蓮有とのふ想カウフ也カウフ也カウフ
國とて夷乃こりき國ありとて大漢又依とて
くまるとそのれが國の樂と奏せり也

想夫恋 白氏文集六十八想夫憐詩玉管
朱ユ信シ莫モ急キ催サ客キ聴チ歌カ送ソ十シ分フ盆ハ長チ安ヤ夫フ
憐レ第ニ句ク清キ君キ重チ唱カ夕タ陽ヤ用ヨ
韻リ府フ云ク于テ頓ト詠カ笛フ曲ク有リ想カウフ夫フ憐レ名ナ不レ雅カ密ミ音オン
和ワ於オ製シ名ナ曲ク号ガク相サ府フ蓮レン禮レ雨アメ良リ王オウ侯コウ蓮レン幕マク事ジ
柳リウ韻オン云ク王オウ侯コウ字ジ仲チュウ室シツ表ヒョウ察サツ曰ク此コノ見ミ虫ムシ小コ己ニ有リ棟トウ梁リョウ

之喪年十八拜秘書良仕齊領吏部用庚果
為長史葉汚與侯書曰庚果行汝綠水依
蒼河其獲也時人以侯府為蓮華池
任彦升が書り王又憲が集の帝々又選四十
方あり又憲を侯り益也府乃尚書令
了侯大にたつゆ大にを蓮有りや
源平感表託仲國嵯峨法輪小督局と
尋りて之終と夫と悲ひて恋とや
想夫憐く云樂也ありこる義ありき也とい
侯云也曰氏又集く夫憐く云付く夫憐と悲ふ
と云傳りや憐とあやまりて恋とせり
回忽通鑑往薛延陀其先匈奴自葉高羅氏

辰薛延陀北安陵水上元魏時号高車良即當唐初
為敕勒諸部唐德宗時清改号回鶻言其栖紮
於鶻鳥之也唐書回鶻列傳云回鶻其先匈奴也俗多乘高輪車元魏時亦号高車部云
十八史畧第六唐憲宗元和三年沙陀朱耶盡
忠與其子執宜未降沙陀勁勇冠諸胡吐蕃每
戰以為先鋒後殺其賊於回鶻欲遷之河外
懼而皈唐置之雲州注鶻本作訖德宗時清
改曰鶻之執鳥也取其舊場之義
大明一統志八十九大州本漢時車師前後王地
前王治交河城即唐交河縣去長安八千二百里
後王治務渾谷即唐蒲類縣去長安八千九百

里漢時以其地勢高敞遂名高昌壘云唐貞觀中平高昌以其地置西州開元中改金山都督府云初西突厥據後王地與高昌相影響及高昌平懼而未降以其地置庭州領金滿蒲類輪臺三縣長安初置北庭都護府後得陷於吐蕃其地有回鶻雜居故亦稱回鶻宋建隆間西州回鶻遣使來貢云元時号畏兀兒地本朝其地名曰火州云又曰西蕃即吐蕃也其先蓋屬云

音樂都凡八回思想夫恋府平調屬之舞也
蠻夷如哥曲中國未分回鶻よりぎくは胡旋
胡騰凉州其州扶南高麗高昌驛茲康國

疎勒の如くは類樂府雜録あり或は舞或
まうふふと云々より白氏新樂府に胡旋女
ハ天竺北末唐居國より獻道州氏ハ道州よ
り貢く蠻子朝々鄭州より来り驛國樂は
貞元十七年より来り西涼伎ハ安西より送來
又日本にハ高麗百濟新羅林邑渤海任那
の如きの舞曲を奏する事國史續日本紀等ハ
載より聖武天皇の時南天竺に波羅門若
提林邑國乃佛指来きり天皇則雅樂寮に
勅して音樂を調て乞とひし日本樂部中
よ菩薩板頭舞林邑樂よりハ彼佛指来
て傳ふる也村上天竺に秦氏女に問ひし

勅策チキウサクもも船フネ太ダイ新シン蘇ソ鞆マ人ヒト為ニ羨セン談タン魚イサ凡ニ世セ
羅國ラコク在ニ稱ヒカ妙ミウ舞マユとありとくや

野槌下卷四者文政十一年戊子秋夜長月
下二日夜於燈下寫之 中村直道

